

9. 歴史民俗資料学研究所

【 到達目標 】

「第8章 教員組織」で述べるが、研究科としての独立性が弱く、研究科の教員の多くが学部を兼担していること、また、教員の多くが日本日本常民文化研究所の所員であったり（13名の教員の内、7名が研究所の所員）、21世紀COEプログラムが採択された期間中は、主たる拠点の教員として、その分担研究者となり（13名中11名）、非文字資料センター開設後は所員（13名中5名）にもなったりと、多くの研究活動は実際にはそうしたところで行われている。したがって、データなどは日本常民文化研究所の項、大学基準協会基礎データ及び下表などを参照されたい。

また、専任の教員は所属学部から研究費を支給されるため、本研究科からの特段の支給はない。また、科学研究費補助金及び研究助成財団などへの申請なども所属学部を通じて行われるため、データなどはそれぞれの学部のデータに委ねることとする。

言うまでもなく、研究面においても研究科としての独立性を確保することが肝要であるが、現状においても、本研究科教員の研究活動の把握や研究業績の質を検証するための研究科独自のシステムを確立する必要がある。

【 現状説明 】

上述したように、本研究科の教員は日本常民文化研究所や21世紀COEプログラム、あるいは非文字資料センターを研究活動の基盤にしており、具体的な数値はそれぞれの項に譲るが、極めて旺盛な研究活動を行っている。本研究科13名中7名が日本日本常民文化研究所の所員として活動しており、同研究所の紀要『歴史と民俗』に研究成果を発表する機会を与えられており、また同研究所が行なう調査研究にも関わっている。

研究科独自の研究活動としては弱いのであるが、全くないわけではない。例えば、本研究科は大学院生の紀要を毎年1回発行しているが、これに毎号ではないが教員が論文を寄稿している（最近の5年間については下表参照）。また、大学院生を指導しての調査の報告書としてこれまで6冊が教員の編集のもとに刊行されているが、これについても下表を参照願いたい。研究時間の確保については「第8章 教員組織」、教員研究室については「第10章 施設・設備」に詳述する。

【 点検・評価 】

上述したように、日本常民文化研究所や21世紀COEプログラム、あるいは非文字資料センターを基盤にした研究活動は旺盛に行われているが、本研究科として、教員の研究活動を把握や研究業績の質を検証するための独自のシステムが確立されていない。抜本的には「第8章 教員組織」のところに述べるように、研究面においても研究科としての独立性を確保することが必要である。

【 改善方策 】

研究科としての独立性の確保が研究環境の改善においても、肝要であるが、他方それが実現しない間でも、本研究科教員の研究活動の把握や研究業績の質を検証するための独自のシステムが構築することは可能であるので、これを構築する。また、研究科独自の研究活動では、かつて歴史民俗資料学という新しい学の分野を模索するために、行われていた研究科の研究会を復活することも一つの方策であると考えている。

神奈川大学大学院 歴史民俗資料学研究科刊行物

1. 神奈川大学歴史調査報告書

	書名		発行年
第1集	小川島の民俗 ―群馬県利根郡月夜野町下津小川島―	福田 アジオ 編集	2004年3月
第2集	渋江公昭家 文書目録(一)	田上 繁 編集	2005年3月
第3集	松原の民俗 ―長野県南佐久郡近江町松原―	福田 アジオ 編集	2006年3月
第4集	渋江公昭家 文書目録(二)	田上 繁 編集	2007年3月
第5集	名越の民俗 ―滋賀県長浜市名越町―	福田 アジオ 編集	2008年3月
第6集	大倉の民俗 ―福島県南会津郡只見町大倉―	佐野 賢治 編集	2008年3月

2. 歴史民俗資料学叢書

	書名		発行年
叢書 1	室町幕府足利義教「御前沙汰」の研究	鈴木 江津子 著	2006年3月
叢書 2	財界人の戦争認識 村田省蔵の大東和戦争	半澤 健市 著	2007年3月
叢書 3	一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国	王 京 著	2008年3月

3. 歴史民俗資料学研究

		執筆者	発行年
第9号	歴史民俗資料学研究科開設十周年記念公開シンポジウム 『歴史と民俗の交錯―記録すること・記憶すること―』 講演 民俗のなかの歴史・歴史のなかの民俗 歴史学という学問 歴史のなかの民俗・民俗のなかの歴史 討論 パネリスト・川田順造・中村政則・福田アジオ 司会・樋川俊忠・佐野賢治 進行・小馬徹 寄稿 歴史民俗資料学研究科での一年を振り返って 翻訳 I・A・サマリン著・南サハリンにおける天皇制イデオロギーの物質的遺構 資料紹介 一旧樺太における奉安殿の遺構を中心に― フィールドノート ヘレン・ミアーズの『亥年』を読む 阿寒アイヌコタンの店頭から 一文 「見た事、聞いた事、考えた事― 「仏神」「神仏」 一平安貴族の生活感覚における神仏の関係―	川田 順造 中村 政則 福田 アジオ 前田 禎彦 ムカイダイス 井潤 裕・監修 半澤 健市 阿部 有希子 繁田 信一	2004年3月

		割って埋められたムラの戦争記念碑 日本における唐箕の形態分析	古谷野 洋子 内藤 大海	
第10号	論文 研究ノート フィールドノート 寄稿 書評	デカルの”語り”に関する一考察 ーダラムサラのデカルの語りを中心にー 雑色ノート ー平安京の庶民生活を文献史料に見る試みー 日本人研究者による初期韓国シャーマニズム 研究 ー秋葉隆の業績を中心にー 離農家を継ぐ ー北海道紋別市のカヨイサクとカ ヨイサク地への定住ー 博物館資料の現在 繁田信一著『陰陽師と貴族社会』 富沢達三著『錦絵のちから 幕末の時事的錦絵 とかわら版』	古谷野 洋子 繁田 信一 金 花子 土田 拓 中村 ひろ子 高野 宏康 大坪 潤子	2005年3月
第11号	論文 研究ノート 寄稿 資料紹介 翻訳 書評	せともの祭りと瀬戸物人形 ミルクとアカマタ ー八重山のふたつの来訪神祭祀の比較ー 銭や五兵衛をめぐる歴史叙述と歴史意識 ー地域の記憶と共同性についての考察ー 大浦の民族誌 ー生活世界の視点からー 明治・大正期における特許資料と唐箕の改良 民俗学の新材料ーインターネットを事例としてー 「河童信仰の歴史研究」序説 ー「氏は菅原」呪歌とヒョウスベ再考ー フランスにおける柳田国男の紹介と評価 I・A・サマリン著・南サハリン(旧樺太)におけ る神社 前田 孝和・山田 一孝・監訳 繁田信一著『平安貴族と陰陽師ー安部清明の歴 史民俗学ー』 祁景澄著『中国のインターネットにおける対日 言論分析ー理論と実証の模索』	小林 公子 古谷野 洋子 高野 宏康 福島 緑 内藤 大海 岡田 翔平 小馬 徹 フレデリック・ル シーニュ ムカイダイス 織田 洋行 高江洲 昌哉	2006年3月
第12号	翻刻 書評 寄稿 研究ノート	『意地喜多那誌』 繁田信一『殴りあう貴族たちー平安朝裏源氏物 語』 歴史民俗資料学研究所への就任に寄せて 博物館における「郷土」・「地域」とその展示 ー 「総合」という視角の系譜ー 蔵書家多賀三大夫常政についての覚書 日本にみられる風水思想について ー都市・ 陵墓造営と家相を事例にー 古流剣術の稽古における諸作法の事例 私は誰? ーある寺院兼修道院にて与えられた	中町 泰子 三村 宣敬 蔡 文高 内山 大介 佐藤 哲彦 高倉 健一 對馬 陽一郎 渡邊 徳子	2007年3月

	論文	立場の中で－ 祖先儀礼をめぐる韓国の仏教と巫俗 ノゾキの商売　－最後ののぞきからくり興行師、聞き書き－ 『朝鮮軍陣図屏風』を読み解く －失われた一隻の真相と第三仮説を打ち出す－ 演説のちから　－戦前期の金沢における永井柳太郎の政治活動－ モンゴル族のオボー信仰　－オボーの基本的種類について－ 常総地方のオタチ行事　－その歴史的民俗的考察－ 特許資料からみた昭和期における唐箕の改良	金 泰順 坂井 美香 佐々木 弘美 高野 宏康 ナランビリゲ 萩谷 良太 内藤 大海	
第13号	論文	道修町と神農祭　－都市同業組織の信仰 横浜専門学校における報国団と報国隊 柳田國男、『新國学談』のころ －民俗学が背負った戦後日本の神道論　その老－ 雄弁家としての永井柳太郎　－四つの演説論の分析を中心に－ 王禎『農書』唐箕絵図の解説 －開放型先行説批判－ 第二次世界大戦後の中国における日赤従軍看護婦　－旧満州を中心に－ 建築史学と博物館　－一九七〇年前後の国立施設への志向－ 木造船の水漏れを防ぐ技術 －昆布を使う技術はどのように福島県只見町に伝播したか－ 都城における木刀生産業の成立過程について 神社の祀り・長所(ながどこ)における「献饌」行事 －子孫に伝えんとする記録－ ティツィング『日本風俗図誌』(一八二二)掲載の二点の火山噴火図について 半澤健市著『財界人の戦争認識－村田省蔵の大東亜戦争－』	小林 公子 齊藤 研也 坂井 美香 高野 宏康 内藤 大海 山田 ノリ子 今井 功一 及川 晃一 對馬 陽一郎 白井 正子 北原 糸子 高野 宏康	2008年3月
	研究ノート			
	フィールドノート			
	寄稿			
	書評			

4. その他

	書名		発行年
	対話する歴史と民俗 歴史民俗資料学のエチュード	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科	2005年3月
資料集	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科刊行物 10年の歩み	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科	2004年3月